

篠原 徹

## 【梅雨時の白い花】

梅雨の6月には白い花が多いといわれる。山を歩くと出会うヤマボウシは清々しい白い花である。溪流沿いの薄暗くて見すごしやすいエゴノキの白い花もいいものである。俳諧・俳句の季語の起源といえば和歌からきた雪月花である。そして「雪を花に見立てる（春に知られぬ花）」、「花を雪に見立てる（空に知られぬ雪）」という見立てという技法がさらに季語に深みを与えている。紀貫之は「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」と桜の散ることを晩春の雪として見立てている。しかし、六月に白い花の多いことを考えると、空に知られぬ雪とはこうした梅雨時の白い花のことではないかと思ってしまう。溪流の道沿いにびっしり下垂するエゴノキの白い花はまさに空に知られぬ雪のようである。峠や山の上から白い花がみえる（山道を歩いていては気がつかない）ヤマボウシは、エゴノキとは咲き方がまるで反対である。しかし山村では、花には縁がなくヤマボウシは砵の槌や餅つきの杵に、エゴノキの実は魚毒やお手玉の小豆の代わりに（虫がつかない）使った有用樹木であった。

自然を歩く 9